

「さあゲームの始まりです」

— 20年後の復讐劇 —

作 印具米（イングヴェイ）

★あらすじ

転校した中学校で壮絶ないじめを受け不登校、引き込みりとなり人生を奪われた男。
20年後、積年の恨みをはらすために凶器を用意し復讐を始める。

★登場人物

・黒川

いじめグループ(四人組)の一人。面倒見がよい。

・白井

いじめグループ(四人組)の一人。気が弱く、黒川の子分的存在。

・蛭田

いじめグループ(四人組)の一人。

※人物が判別しやすいよう「蛭田」のみ赤くしています。

・マスター（酒鬼聖斗（さかきせいと））

転校先の中学校で4人のいじめグループから壮絶ないじめを受け不登校、引きこもりとなった。現在は人里離れた辺鄙な場所でスナックを営んでいる。

(舞台) 人里離れた安っぽいスナック。カウンター席に座る黒川と白井

黒川： 白井、どうだ仕事、うまくいってるか？

白井： 大丈夫だ。職場の仲間、みんないい奴でさ、今度は長く続けられそうだ。

黒川： それは良かった。前のとこ、3日でやめたんだろ。ムリモー使ったんだって、、、

白井： 退職代行ね。俺、気弱いからさ、そういうの苦手なんだ。それでムリモーに頼んだ。

黒川： いくらかかった？

白井： 3万くらいかな。

黒川： えー、ウソだろ。そんなとられんの？ 退職代行って「あの人やめます」って伝えるだけだろ。それで3万？ 俺もその商売始めようかな。「ムリモー」の逆で「モームリ」ってどう？

白井： 「モームリ」か、、、いいね。でもどこかで聞いたような気も、、、とにかく今の仕事に就けたのはクロちゃんのおかげ、感謝するよ。

黒川： たまたま知り合いが人事やっててさ。「いい奴いない？」ってこぼしてたんだ。それですぐお前のことが頭に浮かんだ。仕事なくて困ってただろ。

白井： そうなんだ。家賃滞納しててさ。追い出される寸前だった。助かったよ。クロちゃんみたいな友だちがいてよかった。

黒川： お前と俺の仲だ。これくらいどうってことないよ。

白井： ずっと世話になりっぱなし。恩に着るよ。

黒川： お前とは小学校からの付き合いだもんな。困ったことあれば何でも言って来い。悪いようにはしない。

白井： ありがとう、クロちゃんみたいな友だちがいて幸せ者だ。これからもよろしくね。

黒川： あったりめーよ。お前と俺は「刎頸(フヅイ)の友」だからな。

白井： 「刎頸の友？」、何それ？

黒川： 相手のためなら自分の首をはねられてもいい、それほどの仲良しってこと。中国の故事から来ている。

白井： へー、よくそんなこと知ってるね。

黒川： 俺、三国志とか中国の歴史が好きじゃん。それで知った。

刎頸の友。だから俺はお前を裏切らない。お前も俺を裏切んじゃねえぞ。

白井： 当たり前だよ。クロちゃんは俺にとってかけがえのない友だち。絶対に裏切らない。

黒川： これからも仲良くやっていこうぜ。

ところで高木の奴、なんでこんな店に俺たち呼び出したんだろう。

白井： だよ。突然、家に招待状が届いてびっくり。だって高木君とは中学卒業してからずっと音信不通。最初、誰かのいたずらかと思った。

でも俺たち四人組の合言葉が書いてあったでしょ。それで高木君だと確信した。

黒川： そうそう、俺たち秘密の合言葉。懐かしいな。

「掘るのは」

白井： 「ジャーニーさん」

黒川： 「掘られるのは」

白井： 「ヒカルゲンジ」

黒川： 20年ぶりだな、この合言葉使うの。これ考えたの誰だっけ？

白井： 高木君だよ。

黒川： あいついいセンスしてるな。結局、合言葉、事実だったもんな、びっくり。

白井： 高木君には時代を見る目があるんだね。だからあんなに大儲けしたし。

黒川： それだよ。高木の奴、株で儲けて今や資産3億超えだって？ スゲーな。

白井： 本当すごいね。三菱重工、四井物産、四越、ヨンリオとか、高木君の買った銘柄、軒並み5倍、10倍になった。

黒川： ヨンリオって、サティーちゃんの？

白井： そうサティーちゃんの家。

黒川： へー、あんなおもちゃ会社の株も上がったんだ。

でも高木銘柄ってみんな四がついてんな。三菱重工、四井物産、ヨンリオ、、、

白井： これからは「四の時代だ！」とかXで言ってた。

黒川： 何だ「四の時代」って？

白井： 高木君、4月4日生まれだし、昔から4が好きだったじゃん。

俺たちグループを「四人組」と名付けたのも彼だし、、、験かっただんだと思う。

黒川： Xでは今や日本のバフェットって呼ばれてるらしいな。スゲーな、もう雲の上の存在だ。ところで招待状にあった「耳より情報」って何だろうな。

白井： それなんだよ、もしかして、、、

【蛭田、店の扉を開けて入ってくる】

蛭田： いやー、お待たせ。迷ったよ、ここ陸の孤島？ 辺り誰もいないし空き地ばかり。こんなところに店があるとはね、、、

黒川： おー、蛭田、20年ぶり。立派なおっさんになったな。

蛭田： お前こそ。いいおやじだ。白井は、、、あまり変わってないか。

白井： いやあ、僕も人並みに老けたよ。

蛭田： そうか？ 20年前と全然変わってないぞ。まあ、お前は昔から大人びた雰囲気あったからな。あれ？ 主催者、日本のバフェットは？

黒川： まだなんだよ、あいつが呼び出したのにな。

蛭田： しかし、驚いたよ。突然の招待状。耳より情報ってなんだろうな？。

黒川： 今、その話をしたところ。やはり株関係じゃないか？、、、

蛭田： だろ。俺もそう思って来た。インサイダー情報だったらフルレバ勝負いくぜ。
みんな億り人になれるかもよ。

黒川： だよな、FIRE だぞ。定額働かせ放題のクソ会社とはおさらば。
ざまーミロのヴィーナスよ。みんなで世界一周。

蛭田： 一周じゃもったいない。三周くらいしようぜ（笑）
しかし高木の奴、遅いな

黒川： いつまで待たせるんだ。

マスター： 彼はいらっしやいません。

黒川： えー、今なんて言った？

マスター： 高木様はお見えになりません。

蛭田： 何でそんなこと知ってるの？ あんた高木の知り合い？

マスター： 知り合いも何も、以前大変お世話になった者でございます。

黒川： どうして高木が来れないのよ？ どういうこと？

マスター： 高木様ははるか彼方、遠い世界へお出かけになっていらっしやいます。

【一同（黒川、白井、蛭田）、顔を見合わせる】

蛭田： 何だよ、意味わかんねー。俺たちは1週間前、高木から招待状を受け取ったの。
それでここに来てんだからな。

マスター： あの招待状は私が出したものです。

【一同、顔を見合わせる】

マスター： 私が高木様の名を騙って送ったものなんですよー（笑）

黒川： ふざけんなよ。何言ってんだ、あんた。

【マスター、マスクを外す】

マスター： 私を覚えていますか？

蛭田： 知らねえな、誰だあんた？

黒川： 見たことないけど。

マスター： （喜色満面で）お久しぶりー。20年ぶりですね。

【一同、マスターの顔をじーっと見る。白井が気付き始める】

白井： もしかして、もしかして、、、サカキ？

黒川： サカキ？ サカキって、どこのサカキ？

白井： ほら、中三の二学期に転校してきた、、、酒の鬼って書く、酒鬼聖斗だよ。

蛭田： そういえば似てるなあ。

マスター： 似てるも何も本物ですから。転校してから皆さんには大変お世話になりました。連日、殴る蹴るの暴行、嫌がらせの数々。あれで学校が怖くなり、人間が怖くなり「不登校」、「引きこもり」、「昼夜逆転」、「家庭内暴力」、「リストカット」、「オーバードーズ」の王道パターンを歩んできた酒鬼聖斗です。僕の人生は皆さんによって見事に破壊されました。

(嬉しそうに) ありがとうございます。

蛭田： だから何なんだよ。俺たちに因縁つける気か？

てめーが勝手に学校来なくなっただけだろ。

黒川： 引きこもりの奴らってさ、みんな人のせいにするんだよな。単なる臆病者、弱虫、意気地なし、根性なしなだけだろ。俺たちはそいつらの根性を叩き直してやってんの。

蛭田： 酒鬼、いい機会だ、またボコボコにしてやろうか。なあ黒川。

黒川： 最近、体なまってるし、いい運動になるかも。

マスター： 君たち、高木君みたいになりたいですか？

蛭田： なんだよ、意味わかんねえ。

マスター： 高木君は、、、(拳銃を取り出す)、これで処分しました。

遠い世界へお出かけと言ったでしょ。

【一同、驚愕の表情】

【マスター、1枚の写真(高木の顔面が血まみれ)を見せる】

マスター： 目を閉じた高木君、安らかないい表情してますね。顔中真っ赤だけどトマトジュースでもこぼしたんでしょうかね(笑)

【一同、驚愕の表情】

マスター： 高木君を処分した翌日、皆さんに招待状を送りました。

合言葉「ジャーニーさん」は高木君から聞きました。彼はぶるぶる震えながら秘密の合言葉を洩らしてくれました。

ついでに下半身も漏らしてくれましたけどね(笑)。

【一同、驚愕の表情】

マスター： 高木君は口も下半身も漏らしやすい体質だったんですね。

みなさんは大丈夫ですか？ 大人用のオムツ用意してますよ。

ただし1枚税込み110円です。現金払いをお願いしますね(笑)

黒川： (拳銃を指さし) そ、そ、それ、本物か？

マスター： どうでしょう？ 本物だと思うんですけど、、、そうだ、試してみましよう。

黒川君、こっち向いて、はいチーズ。

【黒川に向けて 引き金を引こうとする】

黒川： わ、わかった。やめてくれ。

【蛭田、逃げようと扉に向かう】

マスター： 無駄です。そのドアは僕しか解錠できません。皆さんは出たくても出られない、言わば赤坂の高級サウナ状態。扉は開かない、非常ボタンは用をなさない、絶体絶命(笑)。

声を上げてても無駄。この辺は人っ子一人いない陸の孤島、言わば日本のチベット。あ、これチベットの差別になりますね。

放送コードに引っかかるのでお詫びします。でも訂正しません(笑)。

蛭田： お前、何考えてる。

マスター： 皆さんへのお礼ですよ。僕をあれほど可愛がってくれましたから。お返ししないと罰が当たります。

黒川： 俺たちを撃つ気か？

マスター： 撃ちますよ、ただし一人だけね、、、

最初に言うておきますが、動いたら即、発射。良い子は動かないでね。

僕は、とある病気でもう長くないのです。あと1年、2年かな。

どうせこの世を去るなら人生の総決算をしたい。そうした思いでここまでの準備をしたのです。

ただ、これ（拳銃）を手に入れるのは難儀を極めました。Amazonでもメルカリでも取り扱ってません(笑)。何とか手に入れたけど高かったな。

最初に高木君を処分したのは、彼が最も僕を可愛がってくれたからです。真っ先にお礼をしたかった。

処分後はちゃんと山に埋めましたよ。ゴミ放置は処罰されます。廃棄物処理法第16条。僕は真面目な一般市民ですからね(笑)

(一同、沈黙が続く)

マスター： この拳銃には弾が6発入っていました。1発は試し打ち、残りの5発で四人組の皆さんと私自身に使う予定でした。

しかし高木君はお漏らし後、突然暴れだし結局そこで3発使ってしまったんです。つまり、この拳銃にはもう2発しか残っていません。

だから皆さんの中のお一人に使わせていただきます。残りの1発は僕用です。

黒川： 一人に使うって、、それは、、？

マスター： それを決めるためにこれから3つ質問をします。その答えによって当選者が決まります。誰が当選するでしょう、ドキドキですね(笑)。

蛭田： 本気か？

マスター： 冗談でこんなもの（拳銃）用意しますか？ 高かったんですよ。クレジットがきかないので大変でした。

皆さん準備はよろしいですか？

(大声で) さあゲームの始まりです！

第一問、僕をいじめのターゲットに選んでくれたのは「どこのイタリア」、じゃなくて、「どこのドイツ」ですか？

【一同、顔を見合わせる】

マスター： 誰なんですか？ 教えてください。誰が僕を選んでくれたんですか？

【沈黙が続く】

マスター： 誰なんですか？ 仕方ないですね、、、じゃんけんで決めますか。

最初はグー、じゃんけん、、、

黒川： ちょっと待て。それは、、、それは、、、高木だ。

だよな（白井に同意を求める）

白井： 僕は覚えてない。

黒川： 何だよ白井、高木が指示したんだよな。

白井： ごめん、僕は覚えてない。

黒川： なことないだろ。ちゃんと言えよ。

白井： 僕は覚えてないんだ。

黒川： 蛭田、高木がけしかけたんだよな。

蛭田： （怪訝そうに）ええっ？ （しばらく沈黙）

ああ、そうだ、高木だ。

マスター： 高木君なんですか？

黒川： 高木だ、間違いない。

マスター： （笑いながら）本当ですか？ おかしいですね。僕が転校した日、高木君は欠席してたじゃないですか。

黒川： それが何か？

マスター： 転校した日の放課後、僕は君たち3人からの視線を感じました。その瞬間「これは来る」と思いました。高木君の欠席したその日に、君たち3人は僕に目を付けました。そうでしょ？

黒川： 違う。その翌日、高木から「やっちまおう」と指示があった。

マスター： 僕をなめないでください。僕はいじめられっ子のプロなんですよ。君たちの学校に転校したのも、前の学校でのいじめから逃れるためでした。

だからわかるんです。プロのいじめられっ子の目をごまかすことはできません。

（声を荒げて）高木のいないところで決めたんだろ。おめーら3人の中の誰かが俺を指名した。誰なんだよ。正直に言えよ、この三バカ野郎ども。

【沈黙が続く】

マスター： では行きますか、最初はグー、じゃんけん、、、

黒川： わかった、言うよ。正直に言う。決めたのはひ、ひ、蛭田だ。

蛭田： ウソだ。お前だろ。「あの野郎気に入らねえな」と、お前が言ったじゃないか。

黒川： それ、お前のセリフだろ。なあ白井、そうだよな。

白井： ごめん、僕は覚えてない。

蛭田： 白井、本当のことを言ってくれ。お前が黒川をかばう気持ちはわかる。だけど、
だけど頼むから本当のことを言ってくれ。

黒川： 白井、決めたのは蛭田だよな、そうだよな。

蛭田： 出まかせ言うな。お前が決めたんだろ。

マスター： 真相は藪の中、ということですか。時間がないので第二問に移ります。

第二問。9月6日の水曜、その日は日本中が歓喜の渦の中にありました。将来の王となられるお方がお生まれになった日ですからね。彼も今では大学生。

時が経つのは速いですね。

でもその日は僕にとって最悪の日でした。昼休み、弁当箱を開けたら、、、大量の砂がふりかけられていました。ショックでした。「♪砂混一じりの茅ヶ崎♪（サザンの「勝手にシンドバット」より）はあるけど「♪砂混一じりの弁当♪」は初めてですね(笑)

誰がやってくれたんですか？

蛭田： 高木だ。

マスター： また高木君ですか、、、

蛭田： そうだ、高木がやった。

マスター： 黒川君、それでいいですか？

黒川： 高木が発案したけど、やったのは、、、蛭田だ。

蛭田： ウソだ。高木がやったじゃないか。お前、それ見て笑っていただろ。

黒川： 笑ってなんかいない。これはやり過ぎと思っていたからね。でもお前、高木の機嫌とろうとして喜んで弁当に砂入れてたじゃん。

蛭田： 作り話すんな。俺に責任擦り付けて逃げようって魂胆だな。

黒川： 言い出したのは高木、でもやったのは蛭田。そうだよな白井。

白井： ごめん、僕は覚えてない。

蛭田： 白井、本当のこと言ってくれ。俺やってないよな。酒鬼、騙されんな。黒川は逃げようとしてウソついている。俺に全ての責任を押し付けてる。砂弁当は本当に高木がやった。俺は見ただけだ。

黒川： 違う、お前がやったんだろ。

蛭田： 汚ねえぞ、黒川。

マスター： 白井君、どちらの言うことが本当なんですか？

白井： 僕は覚えてないんだ。

マスター： 白井君はアルツハイマー気味ですね、まだ若いのに。ここで生き残れたら病院に行くことをお勧めします。

それでは最後の質問です。

第三問。砂弁当事件の次の次の日、端的に言うと2日後ですね、Two Days

Later、9月8日の金曜、教室に残してあった僕の制服は、、、無残にもズタズタに切り裂かれていました。

Who Did It? 誰がやったんですか?

蛭田： 申し訳ない、それは俺がやった。でも高木に命令されて逆らえなかったんだ。許してくれ。

マスター： 中3でしょ、刑事責任能力を問えるんですよ。逆らえなかったとか簡単に言わないでほしいですね。良い子なんだから(笑)。

蛭田： 高木に逆らうと大変なんだよ。

マスター： 僕は毎日、大変な目にあって来たんですよ。

蛭田： ごめん、本当に許してくれ。止むなくやってしまったんだ。

黒川： 止むなく? そうだった? お前、結構楽しそうにやってたじゃないか。

蛭田： また俺を陥れようと、、汚ねえぞ黒川。

黒川： だって本当だろ。お前、高木の機嫌とろうと意気揚々とやっただろ。

蛭田： 作り話はやめろ。酒鬼、信じてくれ。俺はやってない、やらされたんだ。

マスター： 蛭田君、いろいろやってくれたみたいですね。

最後に言い残すことありますか?

蛭田： 違う、酒鬼信じてくれ。お前をターゲットとしたのは黒川なんだぞ。

全ての始まりは黒川だ。あいつの一言から始まった。

黒川： 酒鬼、騙されんな。始まりは蛭田だ。

マスター： 白井君、どうなんですか? どちらの言うことが本当なんですか? 白井君、白井君、、、

時間がないので当選者は蛭田君としましょう。おめでとうございます。

行きますよ、少し痛いけど最初だけだから。では、、、

【マスター、蛭田に銃口を向ける。】

蛭田： ウワー (叫び声)

白井： やめろ。蛭田君の言っていることは本当だ。

マスター： ということは僕をターゲットに選んでくれたのは黒川君なんですか?

白井： それは、それは、、、

黒川： 白井、何だよ突然。蛭田が決めただろ。

マスター： 白井君、どうなんですか? 僕を指名してくれたのは蛭田君ですか、それとも黒川君なんですか?

白井： それは、それは

蛭田： 白井、言ってくれ真実を。

黒川： 白井、どうしたんだよ。蛭田が決めたんだろ。

マスター： 何か黒川君、あやしいですね。

黒川： 白井、俺たち刎頸だろ。

白井： 僕はもうウソをつきたくない。四人組は嫌だったんだ。でもクロちゃんを裏切りたくなかったし、高木君の暴力が怖かった。だからグループに居続けてしまった。でも僕はずっと暴力を振るうことで苦しい気持ちになっていた。

クロちゃんには悪いけどウソをつく人生はやめにしたいんだ。

黒川： 何だよ、突然。酒鬼、気を付けてくれ。白井は混乱している。自分でもわけわからない状況になってる。お前をターゲットにしたのは蛭田だ。これは本当だ。

蛭田： ウソつくな。お前だろ。

マスター： 黒川君、怪しいですね。

黒川： 俺じゃない。信じてくれ。お願いだ。

マスター： おめでとうございます、黒川君、当選です。

【黒川を撃つ。蛭田、白井凍り付く】

マスター： 高木君に続いて黒川君も遠い世界へ行かれました。

「♪サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ、もうすぐ外は白ーい冬♪（オフコースの「サヨナラ」より）」

さて残られたお二人様、落選されて正直ホッとしたことでしょう。

でも残念なことをお伝えしなければなりません、、、

実は、、、高木君は1発で仕留めたんです。つまり弾はまだ3発残ってるんです。

お茶碗にご飯粒を残すのはお行儀悪い。同じく、拳銃に弾を残すのもよろしくありません。おまわりさんに怒られます(笑)

【蛭田、白井、表情が変わる】

良い子の皆さん、何が言いたいかわかりますね。

(大声で) てめえらも始末するんだよ。

蛭田： ちょっと待って酒鬼、いや酒鬼君。撃たないでよ。お願いだ。何でもする。助けてくれ。

マスター： 往生際悪いな。くたばれ。

【蛭田を撃つ】

マスター： さあ残るは白井君ですね。本意ではなくやっていたみたいだけど、でもやったことには変わりありません。責任取りましょうね。

白井： 酒鬼君、君には本当に悪いことをした。僕は撃たれて当然だ。

マスター： 覚悟、できてますね。ではお言葉に甘えて、、、

白井： ちょっと待って酒鬼君。今、思ったんだけど、君、残り1年、2年って言ってたじゃない。残りの人生を大切にしようよ。僕は君を応援したい。君への償いとして僕

の人生を捧げる。酒鬼君、逃げよう。僕は君の逃亡を助ける。約束する。君のために何でもする。だから銃を下してほしい。お願いします、酒鬼君。

僕はまだ生きたい。僕を生かしてください。

僕は母子家庭に生まれ貧乏でもものすごく苦労した。そして君と同じように小学校でイジメられた。それを救ってくれたのが黒川君なんだ。以来、黒川君に逆らえなくなった。黒川君つながりでグループに入ってしまった。

だから君への暴力は本意ではなかった。嫌で嫌でたまらなかった。それをわかってほしい。君の気持ちがすごくわかる。助けてください。銃口をこちらへ向けないでください。お願いします。お願いします。

マスター： そうか、君もいじめられっ子だったのか。

白井： そうなんだ、小4の頃は相当やられていた。だから君の気持ちは痛いほどわかる。だから助けてください。お願いします、お願いします。

マスター： どうしようかな、、、

白井： お願いします、助けて下さい。

マスター： どうするか、、、

白井： お願いします。

マスター： お願いされても、、、

白井： お願いします、助けてください。

マスター： 僕を笑わせてくれたら、、、やめようかな。

【白井、変顔をつくるなど必死になって笑わせようとする】

マスター： 面白くないな、、、

【白井、さらに必死になって笑わせようとする】

マスター： アハハー（大笑いする）

【白井、ホッとした表情をする】

マスター： これ愛想笑いなんだけど、、、

【白井、表情が変わる】

マスター： 痛いのは最初だけ、我慢しようね良い子は。

【白井、真っ青になる】

マスター： 「♪サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ、もうすぐ外は白ーい冬♪」

【笑いながら白井を撃つ】

マスター： 思い知ったか、このクソども。俺の人生を台無しにしやがったクソども。テメーらのせいで俺がどれほど苦しんだか、俺がどれほどつらい思いをしたか、テメーらクソどもには分かんねーだろうな。

人間の集まるところ、そこには必ずイジメがある。学校でのいじめ、それは

教室だけではない。職員室の中でもいじめがある。先生の先生に対するいじめ。

会社でのいじめ、隣近所でのいじめ、老人ホームでのいじめ、世の中いじめだらけ。

なぜいじめがなくなるのか？ それは、、、いじめは最高の娯楽だからさ。虐げられたものを見るのは気持ちいいだろ。優越感を味わえるからな。それが人間の本質。

俺はずっといじめられてきた。不遇の人生だった。こんなクソみたいな人生、繰り返したくはない。

だから、だから、だから、、、、

俺は生まれ変わったら、、、絶対にいじめる側に回る。

【客席に向かって話し始める】

これまでの人生でいじめをしたことがない人いるか？

見てただけというのはいじめの共犯だ。

なぜいじめる奴を止めなかった？

なぜいじめられる奴に救いの手を差し伸べなかった？

【客席に向かって撃つ仕草】

パン、パン、パン、あんたも、あんたも、あんたも四人組と同類なんだよ。

あー、人生楽しいよな、最高だぜ。

【突然、大泣きし始める】

(絶叫気味に) もっと違った人生を送りたかったぜ。

サヨナラ

【自分の頭を撃つ。大量の血が噴き出す。】

完